あるむぜお88

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 88　2009年 6月20日

ガリレオ著「天文対話」初版本　所蔵・写真提供：大阪市立科学館

目次

1-2 シリーズ　世界天文年
①ガリレオ・ガリレイ

3-4 展示会案内
企画展　日食写真展～太陽が魅せる神秘の光～
高砂淳二写真展 AQUA PLANET ～ようこそ青い惑星へ～

5 最近の発掘調査
新たな古墳の発見－御嶽塚古墳群－

6-7 ノート　宮本常一「馬喰爺さんとの出逢い」原稿

8 坂本長利「土佐源氏」資料の世界 ①

9 平成20年度資料受入、利用状況報告

10 小説 探鳥物語 ①　白と黒の彩演

1609年、ガリレオ・ガリレイが人類初の望遠鏡による天体観測を行ってから今年で400年。それを記念して2009年は全世界を通じて「世界天文年」と定められています。当館でも関連の天文イベントがいくつか予定されているとともに、本紙の表紙シリーズでまつわる話を連載していきます。

シリーズ世界天文年

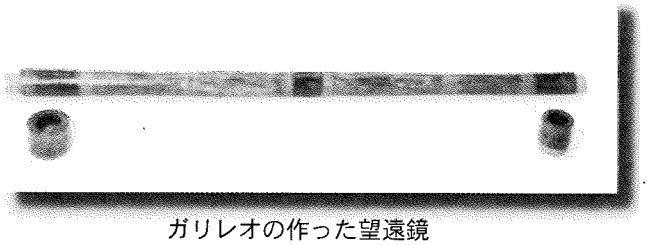
①ガリレオ・ガリレイ

第1回目は、世界天文年のきっかけとなったガリレオ・ガリレイの人生における明と暗について紹介します。ガリレオは1564年にイタリアのピサ郊外に生まれ、1581年にピサ大学に入学、1589年には同大学の講師に就任しました。この前後にガリレオは、「振り子の等時性」や「落体の法則」などを発見しています。当時の大学の一般的な講義は、古代から受け継がれた科学的思想を学ぶにすぎず、実験や観測によって調べるという科学的な方法は、ほとんど行われていませんでした。そのため、新しい成果を次々に発表するガリレオは、多くの論争に巻き込まれることになり、最後は宗教裁判にかけられる結果となったのです。その経緯はこうです。

表紙写真で紹介している1632年出版の「天文対話」に登場する3人の紳士。一人はコペルニクス派サルヴィアチ、もう一人はプトレマイオス派のシンプリチオ、残りのひとりは2人の中間的立場のサグレドという架空の人物です。

17世紀に入ったヨーロッパでは、プトレマイオスが提唱した「太陽や月、惑星などすべてが地球を中心に回っている」という、天動説が信じられていました。それに対して「太陽を中心に、月や地球を含めた惑星などが回っている」という地動説を提唱したのがコペルニクスでした。

ガリレオは、自身が作った望遠鏡で見た宇宙の姿から地動説が正しいことを認識しました。その結果を書物「天文対話」の中で仮説として、登場人物のコペルニクス派サルヴィアチに語らせたのです。しかし、天動説を支持する当時のローマ教皇側近が、サルヴィアチと対極の説を唱えるシンプリチオこそが教皇をモデルにした人物であることを教皇本人に注進してしまいます。かくして「天文対話」は発禁本となり、ガリレオは裁判にかけられることになりました。人生をかけて守ってきた「地球は回っている」という説を否定する主旨の宣誓を強いられた揚げ句、この裁判終了後も、自宅に軟禁されてしまったのです。哀しい人生の結末を余儀なくされたガリレオですが、



ガリレオの作った望遠鏡
istituto e Museo di Scienza, Florence

地動説が現在の天文学の基礎になっていることは周知の事実です。地動説肯定の礎となった栄光の発見経緯はこうです。

1608年オランダで望遠鏡が発明された翌年に、ガリレオは子供が簡単に持てる程度の、口径4cmの望遠鏡を製作しました。その後改良を加えて、月や惑星の観測が可能な“天体望遠鏡”を生み出しました。その望遠鏡で見た宇宙の様子は、それまで信じられていたものと、ずいぶん違っていました。初めて月を見た驚きは、想像を超えるものだったに違いありません。なぜなら、その当時、月はとてもなめらかで完全な球体だと思われていました。ところが望遠鏡を通して見た月は、欠け際が綺麗な弧を描かず、でこぼことしていて、明るく輝く部分には、小さな斑点（影）がたくさん見え、地上と同じように山や谷がありました。

さらに、ガリレオは様々な天体に望遠鏡を向けました。そして、金星の満ち欠け、太陽の黒点、木星の衛星などを次々に発見しました。そこには、考えられていたものとは全く別の世界が広がっていました。この結果をガリレオは、望遠鏡の意義とともに書物「星界の報告」に記しました。これらの発見からガリレオは、コペルニクスの地動説が正しいと確信するに至ったのです。

こうして、ガリレオは宇宙の新たな扉を開き、人類は新しい一歩を踏み出したのです。それから400年の間、科学技術の進歩とともに、さまざまな観測機器が発明され、新たな発見と疑問を見つけ、進歩を重ねてきました。この節目の年に星や宇宙について、見たり聞いたりして、大いに楽しんでみてはいかがでしょうか。　（本間隆幸）

展示会案内

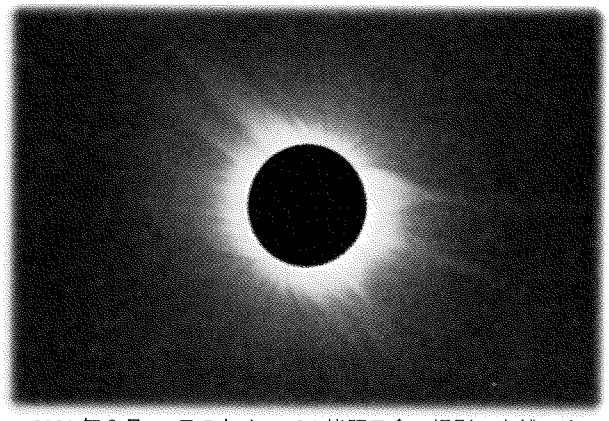
企画展　日食写真展 ～太陽が魅せる神秘の光～

7月11日（土）～9月6日（日）

会場：本館2階企画展示室

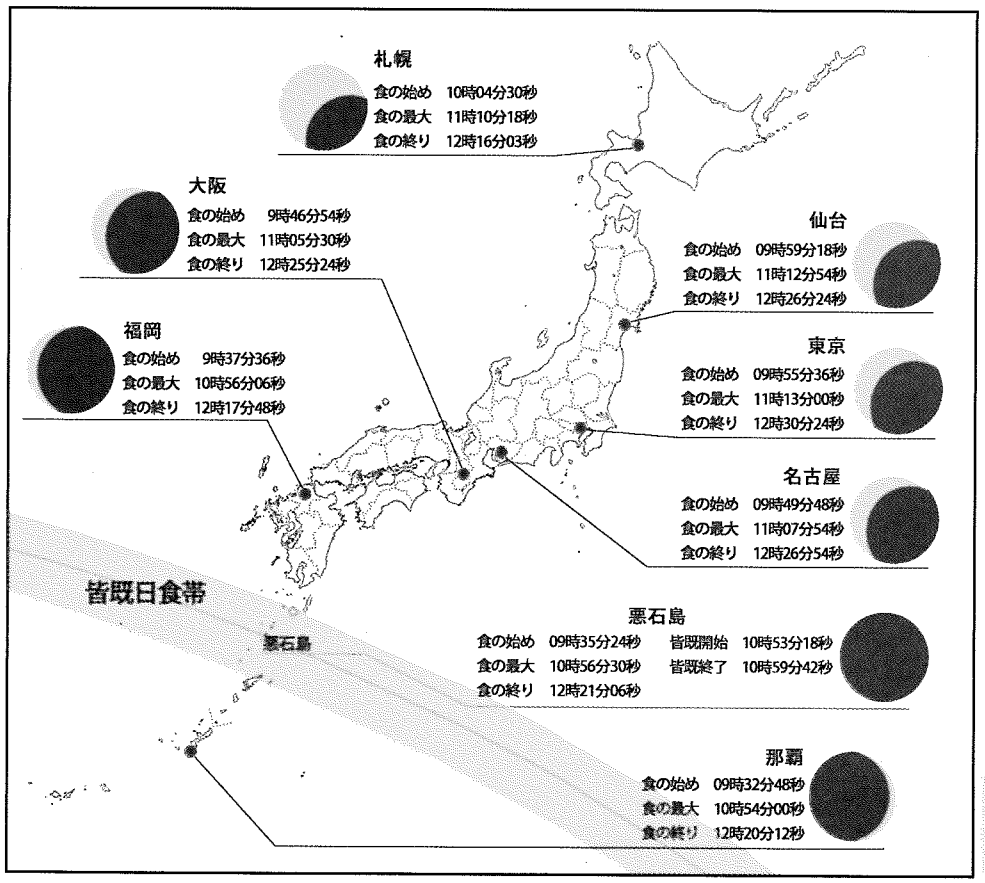
今年7月22日は、日本各地で日食が起ります。東京では部分日食を見ることができます。また鹿児島と沖縄に挟まれた島々では皆既日食となります。今回の日食は、日本で起る46年ぶりの皆既日食です。東京の日食の様子は、9時55分過ぎに欠け始め（第一接触）、11時13分頃食分が0.75となり最も欠けて見えます。そして12時30分頃には元の姿に戻ります。食分は、太陽の直径に対して欠ける割合をあらわしたもので、食分が0.75だと3/4欠けて見えます。

日本での日食観測はわずかに2年振りですが、皆既日食ともなればまさに1963年以来の貴重な瞬間です。もちろん郷土の森博物館が開館以来初めて迎える皆既日食になります。前頁で紹介した通り、今年が世界天文年に当たることも、偶然にしてはでき過ぎた巡り合せです。これらを踏まえて企画した展示会が日食写真展です。



2006年3月29日のトルコでの皆既日食　撮影：大越　治

この展示会では、46年前に北海道で見えた皆既日食の様子をとらえた写真をはじめ、世界各国で撮影された皆既日食や金環日食の写真を展示します。また、明治時代の日食の錦絵やスケッチ、太陽を観測する科学衛星の模型なども展示し、太陽や日食の仕組みについても紹介します。プラネタリウムでも1991年のハワイ・メキシコ日食の様子を撮影した全天周映画「黒い太陽」を期間中の土・日・祝日に上映する予定です。この展示会が、星や宇宙に興味を持つきっかけとなれば幸いです。　（本間隆幸）

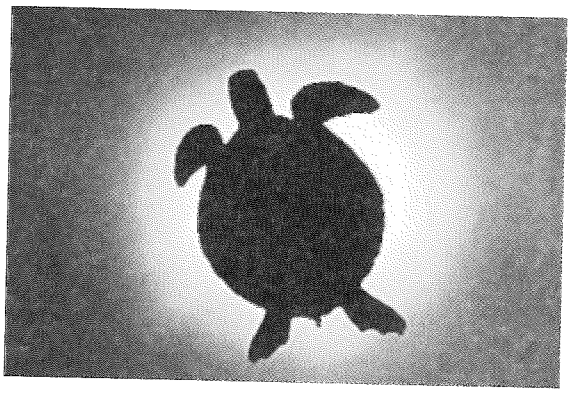


2009年7月22日の日食
日本各地での見え方

展示会案内　府中市制施行55周年記念

高砂淳二写真展
AQUA PLANET
～ようこそ青い惑星へ～

7/18(土)～8/31(月)
会場：本館1階特別展示室
観覧料：大人300円、中学生以下150円



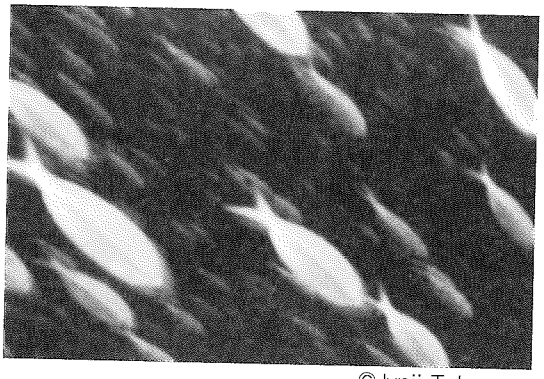
©Junji Takasago

地球が美しい惑星と呼ばれる所以は、何よりも海の存在が大きい。表面積の70%を占める海洋の深い青光が母体となって、そこに陸地の土色や雲の白色がミックスされて奇跡的なコントラストを生んでいるからだ。(残念ながら宇宙飛行士以外は直にそれを拝むことはできないのだが･･･)

宇宙のほんのわずかな一角に誕生した天の川銀河････その大渦巻の、これまた外側の極めてわずかな空間に形成された太陽系で奇跡は起った。恒星である太陽から丁度いい距離に地球が置かれたのである。いい距離というのは言うまでもなく、暑からず寒からずという意味だ。適度な温度が保てる距離･･･つまりは水が液体で存在できる環境が与えられたということなのである。まさに神々の成せる業のごとし････

©Junji Takasago

海洋は地球環境をもコントロールするようになった。様々な気象や海象は海から生じる雲や海水温・海流に起因し、また、酸素を始めとする膨大な資源の生産庫・貯蔵庫として、惑星維持には欠かせないエネルギー供給源である。そして何よりも大きなことは、この星に生命を送り出した事実である。すべての生命は海から発進した。長い年月を掛けてあるものは陸上に進出して、より高度なレベルを目指した。海は現在の地球上にある多様な生命のゆりかごとして、今後この星が存続していくための最重要条件として、なくてはならない母なる存在であり、未知の領域も多い。



©Junji Takasago

写真家・高砂淳二氏はそこに目を付けた。何とか海そのものの躍動感と、そこに生きる生命の多様性や臨場感を伝えることはできないものか･･･限られたスペースでとても表現しきれるテーマではない･･･でも、垣間見るだけでもいい。まずは体感することである。海とは何なのか？生命とは何なのか？そしてこの青い衣装を奇跡的にまとった地球という惑星の神秘を考える機会となれば幸いなのだ･･･と。

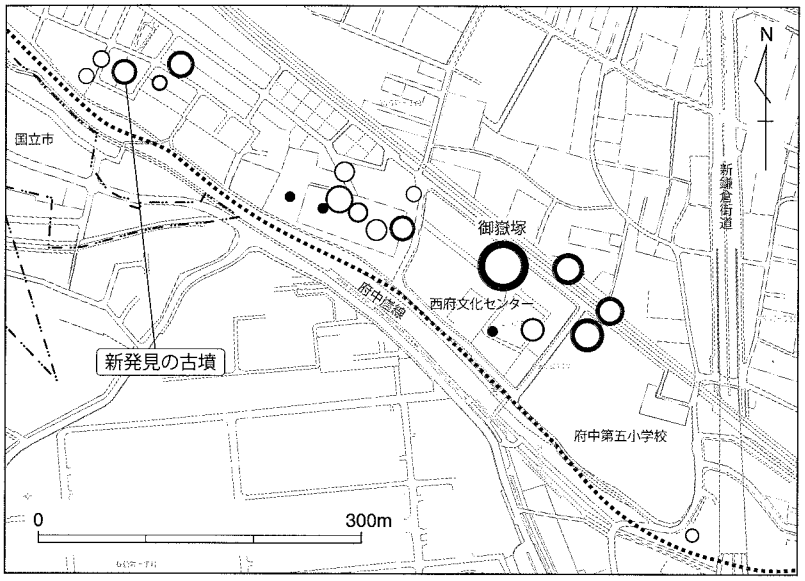
開催の季節は夏本番･･･夏休みの定番が未来永劫、海と山であり続けられるように、偶然にも与えられた素晴らしい自然を大切に考えたい。会場は写真で構成された疑似リゾート地･･･広がる海の表情は、潮騒や島の涼風さえも運んでくる。

(中村武史)

最近の発掘調査

新たな古墳の発見
―御嶽塚古墳群―

西府町一丁目　府中市文化振興課文化財係　西野　善勝



御嶽塚古墳群　古墳分布図　　○は周溝　●は石室

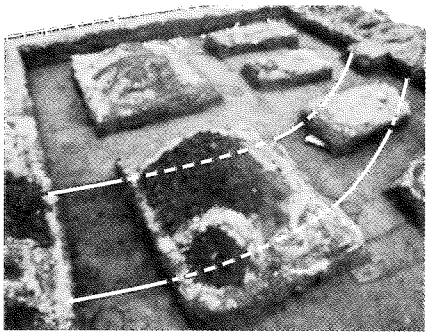
今春、ＪＲ南武線西府駅がオープンしましたが、この駅の周辺では区画整理に伴う発掘調査などにより、古墳時代の遺構が多数確認されています。今回調査が実施された西府駅西方約 400 mの地点でも、新たに古墳が発見されました。

検出された遺構は、直径 15 m程度の円墳を廻る周溝の一部と考えられます。溝の規模は幅約 2 mで、長さ約 8 mにわたる弧状の溝です。この付近では、これまでにも古墳が発見され、今回のものを含めると、東西約 100 mの範囲で、5 基もの古墳が検出されたことになります。また、西府駅周辺の府中崖線沿いで確認された古墳は、全部で 20 基になりました。

これらの古墳の集まりを、御嶽塚古墳群と呼んでいます。古墳の周溝や石室からは、円筒埴輪や圭頭大刀など希少な遺物が出土しており、築造年代は 6 世紀前半から 7 世紀前半と考えられます。この時期の古墳は群集墳といわれ、一定の範囲にまとまって造られるのが特徴です。今回発見された古墳も、6 世紀以降に築造されたものと考えられ、現在のところ、この辺が御嶽塚古墳群の西端となっています。では、古墳の分布範囲は、どこまで広がるのでしょうか。

御嶽塚古墳群の西方約 500 mには、国立市東部の下谷保古墳群があり、さらに西方の青柳古墳群まで古墳の分布が続きます。一方、御嶽塚古墳群の最も東端に位置するものは、新鎌倉街道の縁にあり、その東方約 200 mには、高倉古墳群があります。高倉古墳群から白糸台古墳群までの間約 3km の範囲では古墳が発見されていません。こう見てくると、高倉古墳群から約 5 km西方の国立市青柳古墳群まで、分布密度に多少の違いはありますが、崖線に沿って古墳が連なって分布していることが分かります。

以上のように、府中市内の古墳時代の資料は、少しずつ増えています。それにつれて多摩川中流域の古墳時代の様子も、徐々に明らかになりつつあります。



新たに発見された古墳の周溝

※白線が周溝

NOTE

宮本常一「馬喰爺さんとの出逢い」原稿

佐藤智敬

坂本長利一人芝居「土佐源氏」に寄せた思い

宮本常一「馬喰爺さんとの出逢い」直筆原稿

坂本さんとの出逢い

府中市で晩年の20年をすごした民俗学者宮本常一（1907～1981）は、1941年（昭和16）に高知県の檮原で出会った老人から、女性遍歴をも含んだ身の上話を聞き、それを書き留め、後にそれをもとにした作品を完成させます。それが代表作『忘れられた日本人』（未来社、岩波書店などから刊行）のなかでも「梶田富五郎翁」と並んで傑作とされている「土佐源氏」です。

「土佐源氏」が雑誌『民話』に発表されたのは1959年（昭和34）のことなので、今年で50年になります（『忘れられた日本人』刊行はその翌年）。宮本の調査記録自体は戦災で焼失しました。それでも印象が強かったため、宮本は記憶やメモをもとにこの作品を成したといいます。

「土佐源氏」の内容の真偽については現在でも議論があり、創作・改変がある、ということが指摘されています。にもかかわらず傑作とされてきたのは、内容が人の心を打つとともに、「土佐源氏」をライフワークとする俳優坂本長利さんの公演活動の影響があるように思います。坂本さんは「土佐源氏」の一人芝居を、日本各地で40年、1,100回以上にわたり続けて来た方です。

2007年（平成19）4月のこと。世田谷区尾山台駅付近の喫茶店ではじめて坂本さんとお会いすることができました。坂本さんを応援し、『土佐源氏つうしん』を発行し続けている坂本長利応援団の紹介を受け、舞台興行の旅回り先へ何度か

連絡していたため、初対面のような気はしませんでした。

この日坂本さんとお会いしたのは、この年開催予定の宮本常一生誕100年記念特別展の関連事業として実施する公演の打合せが目的でした。打合せの中で、宮本常一とのエピソードとして、公演を2度見てもらったこと、坂本さんが「土佐源氏」のモデルにそっくりの役作りをしていると誉められたこと、猿まわしの猿とギャラを比較されたことなどを直に聞くことができました。

実は坂本さんとお会いする前に、宮本常一にまつわる資料を何かお持ちではないですか？と電話で伺っていました。すると「土佐源氏について宮本さんの解説がついたLPレコードとその解説の直筆原稿がある」というお返事でした。恥ずかしながらそこではじめて、「土佐源氏」のLPレコードがあること、そしてそこに宮本常一自身が寄稿していたことを知ったのでした。その解説文のタイトルは「馬喰爺さんとの出逢い」。坂本さんにお会いしたときはじめて、それらを見せていただくことができました。数少ない「土佐源氏」の、そして原作者宮本常一と坂本さんをつなぐ資料の発見でした。

その結果、特別展では、漫画家青柳裕介氏が描いた漫画版「土佐源氏」を収録した雑誌（ビッグコミック1984年1月増刊号）や、1981年（昭和56）に亡くなった宮本常一を追悼するために

坂本長利一人芝居「土佐源氏」の一コマ

行われた公演「まつりはええもんじゃ」（佐渡國鬼太鼓座、坂本長利、周防猿まわしの会などが出演）のチラシなどとともにそれらを「土佐源氏」関係資料コーナーに展示することができました。

直筆原稿の内容

「雪の深い韮が峠をこえて伊予浮穴から土佐檮原へ越えたのは昭和十六年一月であった･･･」、とはじまります。そして「私の書きとめた話を坂本さんはあの爺さんの心になって今も演じ続けている。そして多くの共鳴者を得ている。あるいは共鳴者の心の中に生きているのかも知れない。」と結んでいます。20字×10行の200字で一枚になる原稿用紙で11枚。約2,000字程度の短い文章です。

原稿はB6版で左下に小さく「宮本常一」と刷り込まれた原稿用紙です。これまでいくつか宮本の直筆原稿を見てきましたが、あまりこの型式のものは数多くは存在しないように思います。

多くのものは「祭魚洞文庫」と記された同サイズの原稿用紙に書かれています。祭魚洞とは、師であり研究協力者である渋沢敬三の書斎の名前です。宮本は長く渋沢邸に住み、渋沢の主催するアチック・ミューゼアム（現在の神奈川大学日本常民文化研究所）の所員であったことから、その原稿用紙をたくさん持っていたのでしょう。原稿にとどまらず、手紙もその原稿用紙に書くこともありました。小さなサイズの原稿用紙であるため、電車などでの移動中にもしたためることができ、重宝していたようです。この原稿用紙もそれと同様の大きさのようです。

宮本常一が、逝去の2年前の1979年（昭和54）、一人芝居上演300回を記念して製作されたレコード「土佐源氏」のために書き下ろした「馬喰爺さんとの出会い」。現在著作集内に収録されておらず、坂本長利一人芝居「土佐源氏」のパンフレットに再録されたのみです。LPも絶版です。

府中市とは関係ない、坂本龍馬脱藩のルート上にある高知県檮原町での経験を綴った内容。しかし、宮本常一を語る上で見逃すことのできない代表作「土佐源氏」に関する重要資料です。縁あって博物館にご寄贈いただくこととなり、当館としてもはじめて所蔵する宮本常一直筆原稿の資料として大切にしていきたいと思います。

坂本長利「土佐源氏」資料の世界

① 価値ある資料群　博物館へ

1983年（昭和58）、愛知県常滑市で行われた公演のポスター。坂本さんの姿と、いささかおどろおどろしいコピーが「土佐源氏」の興味を引く

宮本常一の代表作「土佐源氏」の世界にはまった俳優・坂本長利さん。40年以上にわたって一人芝居を続けています。その迫力はものすごく、一時間ほどの上演時間をまったく長く感じさせず、観客を魅了しています。

坂本長利さんは1929年（昭和4）島根県に生まれ、1951年（昭和26）に「ぶどうの会」に参加し役者となり、舞台や映画などへの出演が多数あります。最近では「Dr.コトー診療所」（フジテレビ系列）で村長さんの役をやられたことで知られています。平素は小柄な体に帽子をかぶり、ニッコリと微笑む姿が私にはとても魅力的な俳優です。本年傘寿（80歳）を迎え、いよいよ土佐（高知県）檮原で宮本常一が出会ったとされる老人（通称「土佐源氏」）の世界をより深く演じる年齢になっているように思います。

一人芝居は、暗い舞台に小さな台を置き、蝋燭の炎がゆらめく中で盲目の老人が愉しげに、時に哀しげに、さまざまな表情で女性遍歴を中心とした自らの半生を語る、というものです。大ホールからお寺の境内、個人宅などさまざまな会場で演じ、現在1,100回以上の公演を数えています。

当館でも2007年（平成19）に宮本常一生誕100年を記念して特別展「宮本常一の足跡」を開催し、その関連企画として坂本さんの一人芝居公演を行うことができました。その後、様々な縁が重なり、坂本さんが演じてきた「土佐源氏」に関係する資料約1000点を宮本常一関係資料として寄贈していただくことになりました。

その内容は、坂本さんが全国各地で行ってきた公演に関する資料や報道記事、坂本さんの芸能界での交友関係を知る貴重な資料、坂本さんが演じる「土佐源氏」を描いた絵画など、非常にバラエティに富んでいます。

特にポスター類はさまざまな種類があります。固定した画像を使用するわけでなく公演ごとにさまざまな形式のデザインがなされ、見ていて飽きません。資料群はまだ整理中ですが、現在のところ約50枚のポスターが確認されています。独自のイラストを描くもの、迫力ある写真を使用するもの。あえて文字だけで表現するものなど多岐にわたります。

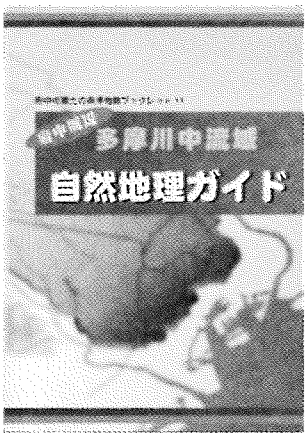
府中で晩年をすごした民俗学者・宮本常一が生んだ傑作「土佐源氏」の世界は、坂本さんなりの世界観で舞台芸術に昇華されています。作品内容についてはノンフィクションではなく宮本による創作もあることが指摘されていますが、それでも人の心を打つ作品として依然受け入れられています。衝撃、感動を呼ぶ作品であるため、宮本常一理解に加え、昭和史、芸能史、人生観までを考えるきっかけになります。

坂本さんによって解釈され、描かれた『忘れられた日本人』「土佐源氏」に関する資料群。これからしばらく、特筆すべき「土佐源氏」の世界の一端を資料から眺めていきたいと思います。

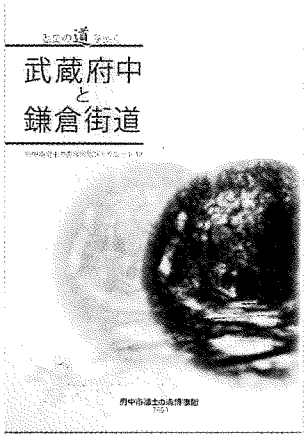
（佐藤智敬）

「府中市郷土の森博物館ブックレット」10～12 一挙に3冊刊行！

江戸時代の中頃、押立村（府中市押立町）の名主から代官になった川崎平右衛門の足跡をたどります。　700円



多摩川中流域の地形や地理についての解説と、長年にわたり観察会で歩いてきた様々な自然地理のコースを紹介します。　600円



鎌倉街道上道を軸に、中世の武蔵府中の様相を復元し、鎌倉街道沿線の風景や機能を探ります。　500円

＊その他の刊行物＊

『府中市郷土の森博物館年報』22号＊＊＊平成19年度の事業報告です。　300円

『府中市郷土の森博物館紀要』22号＊＊＊学芸員等による研究報告・論文集です。　400円

博物館のとなりに茅葺き農家があった－芝間の暮らし昔語り－　［小野　一之］
多摩地方における近世瓦生産の一様相－町田市カワラ峯瓦窯と府中の寺社－　［深澤　靖幸］
番場宿神戸高橋仁左衛門の「伊勢参宮日記」について　［花木　知子］
《講演録》大國魂神社の太鼓　［宮本　常一］
講演録「大國魂神社の太鼓」発表にあたって　［佐藤　智敬］
川崎平右衛門が開いた「武蔵野新田御栗林」について　［野田　政和］

『府中市内家分け古文書目録12 本町清水斎兵衛家文書目録　馬医心懸下与市郎家文書目録　番場神戸高橋仁左衛門家文書目録』
＊＊＊府中市内に残る古文書の目録です。　300円

平成20年度 寄贈・寄託資料一覧

No.	寄贈・寄託者	資料名	分類	数量	受入
1	秋元良夫	団扇・旅館関係資料	民俗	一括	寄贈
2	稲垣茂夫	ドウ	民俗	1点	寄贈
3	酒井宏雄	白黒テレビ	民俗	1点	寄贈
4	坂本長利	土佐源氏関係資料	民俗	一括	寄贈
5	田中勝彦	看板・釜	民俗	2点	寄贈
6	野村重人	消防半纏	民俗	3点	寄贈
7	吉垣桂治	縄ない機 他	民俗	7点	寄贈
8	桑田健一	桑田家文書	歴史	一括	寄贈
9	小菅恭子	知行目録 他	歴史	8点	寄贈
10	秋元良夫	秋元家文書	歴史	一式	寄託
11	石井正己	アコーディオン	教育	1点	寄贈

平成20年度 利用状況

区分		有料 一般	有料 団体	減免（障害者・4歳未満等）	合計
博物館観覧者 開館日数308日	大人	160,740	5,610	40,770	207,120
	子供	24,331	21,925	53,485	99,741
	小計	185,071	27,535	94,255	306,861
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数285日	大人	23,761	1,738	5,050	30,549
	子供	10,783	10,691	5,101	26,575
	小計	34,544	12,429	10,151	57,124

★「あるむぜお」は定期購読できます！★

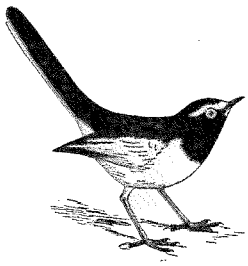
「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承ります。4回分の送料320円（切手でも可）を添えて、受付カウンターでお申込みください。

小説 探鳥物語 ① 白と黒の彩演

中村武史

府中市で長年、街の自然観察指導員を続けている野鳥の専門家・当馬尚頼は困惑していた。毎月行っている市民対象の探鳥会にここ数年大人に混じって熱心に参加を続ける４人の中学生がいた。最初の内はそれこそ“熱心によく来るな”程度の認識だったが、何度も共に観察を重ねる度に良い意味で普通ではない少年少女であることに気が付いたのだ。

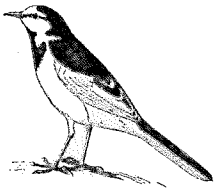
須田奈津子は姉御肌で、４人の中ではリーダー格のようだ。観察した鳥のスケッチがプロ級の腕前である。しかもその描写に費やす時間がマッハ級に速い。若田部怜は奈津子とは幼馴染のようで、いつも２人で仲むつまじい。奈津子が元気印の象徴なら怜は冷静沈着で物静かな雰囲気を漂わす。彼女はパソコンを携帯し、いつも観察データをその場で打ち込んだり情報検索に忙しい。これまた超ハイスピードのブラインドタッチ。もう一人落ち着いた感じの女子は木田世衣子、頭脳明晰かつ中学生にしては大人びた美人系であるがゆえ、少々の陰りは逆に魅力に転じる。ここまでが全て女子生徒であるのは、時代の風潮といった所かも知れない。黒一点、この複数の女子を束にしてもかなわない程に存在感ある男子が最後に紹介する綱川勝志である。図体は大人以上にデカく、人懐っこい表情に誰でも癒されてしまう。彼の特技は素晴らしかった。聴覚がエスパー並で、あらゆる状況下でも一羽の小鳥がさえずる声を聞き逃さないのである。この４名がスクラム組むと物凄い成果が上がる。当馬は彼らを単なる参加者としてこのまま傍観すべきかどうかを迷っていたのである・・・・・。



セグロセキレイ

今日は月例観察会、多摩川の河原に降り立ち、各参加者は双眼鏡を手に全神経を集中させている。春から初夏にかけての季節、すでに南から渡って来たツバメの滑空姿も著しい。相変わらずいつもの中学生たちは熱心に双眼鏡を覗いている。一瞬何かに思い当ったような表情を浮かべた当馬は、おもむろに彼らに接近していった。「君たち、今日も熱心だねぇ、目ぼしいものは見つかったかい？」リーダー格の奈津子を捕まえて質問すると、「こんにちは先生、さっきからハクセキレイを見てるんだけど、ちょっと変な感じで・・・何か・・・」「どれどれ・・・」おもむろに双眼鏡を同調させる当馬であった。数十秒の後、にこやかな表情で奈津子に振り返ると「果たして本当にハクセキレイかな？」と質問する。リュックからポケットサイズの野鳥図鑑を取り出し、今一度確認する奈津子であった。

ここぞとばかりに当馬の解説が始まる。「この辺りで見られるセキレイの仲間ではハクセキレイが多いが、実はよく似た種類が他にいるんだよ。よ～く見てごらん、白と黒のツートンカラーは同じだけど配列はどうなっているかな？」気が付くと奈津子の周りには３人の仲間も集まっていた。図鑑のハクセキレイをまじまじと見ながら怜が頷きつつ発言する。「先生、白と黒の割合が違います。え～と、そこのセキレイは頭から胸、体の上面が黒くて、お腹が白い感じです。図鑑のハクセキレイは顔が白いよ」「本当だ・・・さすが怜ちゃん、鋭いわね」感心した世衣子が小声で呟く後方から巨体が姿を現した。「あの～、自分、セグロセキレイじゃないかと思います・・・ほら図鑑の同じ頁に載ってます」



ハクセキレイ

当馬がまとめに入った。「大正解だ綱川君、素晴らしい！よく見てごらん、双眼鏡で観察している鳥は額部分だけが白いけど、全体的に顔が黒いよね。逆に図鑑のハクセキレイは頭から背中、喉から胸にかけては黒いが、顔は白い。過眼線と言う眼を通る黒い模様が特徴的だね。微妙に違う白と黒の位置で見分けることが大切なんだよ。他に腹の黄色いキセキレイという種類がいるが、黄色が目立つから一目でハクやセグロとは区別できる。間違えやすいのはやっぱり白と黒のセキレイということだ。両方とも日本では一年中見られる鳥だが、ハクセキレイはユーラシア大陸やヨーロッパなどにも広く分布する。でも何と、セグロセキレイはこの日本でしか見ることができない固有種なんだよ」「え～っ、そうなんですか？」と綱川がめずらしく大声を上げた。

「どうだろう、折角知り合えた中だし、もう少し丹念に野鳥を追いかけてみないか。今日みたいな観察会の日以外にもあちこち探鳥しながら皆の経験と知識を増やしてあげようと思うんだけど・・・・・それだけの熱意を君達から感じるからね」当馬の投げ掛けに４人の目は瞬時に輝き、合唱コンクールでも滅多に聞けないようなハーモニーが河原にこだました。「ヤッター！先生、よろしくお願いしま～す♪」

府中市郷土の森博物館だより〈あるむぜお〉No.88 発行日 2009/6/20
編集・発行（財）府中文化振興財団 府中市郷土の森博物館
〒183-0026 東京都府中市南町 6-32 TEL 042-368-7921
http：//www.fuchu-cpf.or.jp/museum/